

挨拶

年度初めのご多用のところ、札幌地区バスケットボール協会 U12 カテゴリー総会にお集まりいただき、ありがとうございます。わたくし齊藤八起ですが、U12 部会長の任も5年目を迎え、いよいよ最後の務めと身の引き締まる思いでいたるところですが、先週体調を崩し緊急入院、昨日一時退院と療養中ですので、大変心苦しく無念ではございますが、本日欠席する決心をさせていただきました。

さて、コロナ禍も丸3年を終え、いよいよ5類に移行します。ガイドラインや各通知、感染状況に応じてではありますが、皆様のご理解ご協力のおかげで昨年度から各大会を実施できています。大会ができるようになってきたことで、見えてきたことがたくさんあります。本日は部会長としてはもちろんですが、一指導者、一保護者会、一審判員という子どもたちを支える皆様と同じ立場としてお話をさせていただくことをお許しください。

子どもたちは、バスケットボールを通じて成長しています。では、私たち大人はどうでしょうか。子どもたちを指導する、支える、応援するという大人として、指導者、レフリー、運営者、保護者としてのレベルを、子どもたちにおいていかなないように向上させる努力をする義務があると思います。

私は1月に、D級ライセンスの認定講習会に参加してきましたが、大変緊張感があり勉強になりました。そこでいちばん忘れられなかったのは、講師を務めてくださったS級コーチの方の、「バスケットボールを知らないコーチに教わる子どもほど、かわいそうなことはない。」という言葉です。頭をガツンと殴られたかのような、自分の不勉強さに目が覚めましたし、コーチとしての成長を心に誓いました。皆さんの指導は、また皆さんのチームの指導者の教えは、チームが勝つための指導になってはいないでしょうか。例えば、アンダーカテゴリーにおけるマンツーマンの指導です。趣旨は、「プレイヤーズファースト」を尊重し、目先の勝利に捉われない長期的視点に立った指導の推進というものであり、マンツーマンにより、子どもたちに・1対1でバスケットボールを楽しむ・個人のスキルアップを図る・状況判断力、理解力を高める・想像力を養うことが大切です。ここにお集まりの皆さんでしたら、一度は読んだりにしたことがあるでしょうし、当然ご存じのはずです。

失点を防ぐための目的でただ下がってDFしたり、ゴールを中心に守ったり、まずヘルプポジション、いや常にヘルプポジションに下がっているチーム、指導は見られないでしょうか。マンツーマンですから、まずはマッチアップの意識と習慣、力を身に付けさせる指導が大切で、その上でヘルプやカバーといった意識や「足」の力を伸ばすことが必要なのだと考えます。ベンチから、「下がれ」「小さく守れ」「ヘルプ」「カバー」などといった指示が多くみられる場面、チームはないでしょうか。体の大きな選手に、未だにゴールに背を向けてプレーする時間の長い指導となっている場面はないでしょうか。1対1の強い選手だけにたくさんボールを持たせ、他の子は攻撃しないアイソレーション多用の指導はないでしょうか。

また、MCが黄色や赤の旗を上げなければならない状況が多くみられないでしょうか。マンツーマンが身に付いていないことを、自分の指導ではなく教えることもできない、と選手のせいにしていないでしょうか。マンツーマンだけではありませんが、指導してもできないではなく、一人一人に合わせてどうしたらできるようになるか考えて指導するのがコーチの役割であり、子どもが、バスケがおもしろい、1対1が楽しい、上手になりたい、強くなりたい、と努力する気持ちや自信をもたせることができるのがコーチです。試合中にベンチから叫ばれなくても怒鳴られなくても、自分で、自分たちで考え判断できる選手を育ててほしいと思います。

シュートを打たれた時に、「アウト!」「リバウンド」と声を出すのは選手であってベンチではないはず

です。ベンチからかける言葉は、しっかり練習してきたアウトやリバウンドを頑張っている選手への「ナイスアウト」「ナイスリバウンド」といった言葉ではないでしょうか。ゲーム終盤、負けているチームのコーチが「あたれ」と叫んでいる。時間と点差など試合の状況を自分たちで判断し、前からあたれる選手に育てるのがコーチであり、負けているから「あたれ」と慌てたようにベンチや保護者協力席から叫び声が出ているのはいかがなものでしょうか。

接戦の4ピリ、相手チームが4ファールになりました。皆さんなら選手にどんな言葉をかけるでしょうか。「積極的にいこう」「強気で攻めよう」「気持ちで負けない」こんな言葉でしょうか。決して相手チームの選手に、意図的にプレッシャーをかけ委縮させるような、「相手は4ファールだぞ、もうファールできないんだぞ」「どんどん突っ込め」こんな言葉ではないはずです。

こんな試合もありました。腹が立ちましたし、とても残念、というか悲しい気持ちになりました。6年生の少ないチームの4番が4ファールを取られました。すると、協力者席から「4番、ファール4つだぞ」「せめろせめろ」と声が飛んだのです。そして、5ファールを取られ退場の際には、「よ～し」「やった」と拍手まで起こりました。子どもが精いっぱい戦っている令和のミニバスケットボールで、ありえない、あってはならない光景です。保護者協力者の声としてもだめですし、それを許しているベンチ、指導者もだめです。今は選手、ベンチ、協力者、応援者、レフリー、TO、運営者などの間のリスペクトが当たり前なのに、とても残念な場面でした。ベンチでうちわをたたきながら応援しているチームがあります。うちわはベンチに戻ってきた選手を扇ぐためのものであり、たたくものではありません。大会ができなくなったことで忘れられてしまった感がありますが、これは、以前からの常識です。たたかれて破れたうちわが試合後の椅子の下に落ちていたりすると、これも残念な光景です。他にも、試合、大会が通常に戻ってきたことで見えてきたことはあると思います。皆さんのちょっとした目配り心配りがあるだけでも、大会が気持ちよく行われることは間違いありません。私だけでなく、部会員やブロック運営委員、会場校の保護者会の方などに、「ありがとうございました」と声をかけてくださる方が多いのは、札幌のいいところの一つです。

最後に、私のところやU12部会のメンバー、そして地区協会に、残念ながら指導者やその指導についての相談や訴えが入っています。お話を伺いながら、指導者と保護者会で話し合いができませんか？チーム内で解決の糸口は見つかりませんか？と伝えることもありますが、それができるなら電話やメールなどしません・・・というのが本当のところだと思います。札幌の指導者のほとんどが、バスケットボールに対して熱心で勉強家であり、子どもの指導支援に誠実な信頼できる、ファーストスラムダンクを観て涙を流すような大人であるにもかかわらず、未だに自分のチームの指導者や指導の在り方、言葉や態度に悩んだり苦しんだりしている方がいるということがとても残念です。逆に、指導者にとっては、賢明な理解者といえない保護者、協力的といえない保護者に悩んでいることもあるかもしれません。皆さんのチームは、いかがでしょうか。

現在、世界で通用する素晴らしい選手がたくさん生まれています。海外で活躍する選手の動画も即見られます。感激した女子ナショナルチームの東京五輪銀メダルや魅力的な選手が増えた男子ナショナルチームの活躍も楽しみです。そして今なお映画「ファーストスラムダンク」の感動は、日本だけでなく海を越え渡っています。なぜ、結果が分かっているにも拘らず、あの映画は何度観てもあんなに感動するのでしょうか。ここを皆さんと語れることができたら、きっと朝になってしまいますので、今はやめることにします。

札幌地区は、ただ強いだけではなく、全道そして全国でもいろいろな意味で胸を張って誇れる地区だと思っています。子どもたちの前で、笑顔で胸を張れる指導者、保護者会、運営者に成長してまいりましょう。今年度も、札幌地区バスケットボール協会U12カテゴリーとそこでプレーし成長していく子どもたちを、共に支えてくださいますよう札幌の自宅から、心を込めてお願いいたしまして、総会の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお祈りいたします。ありがとうございました。